―特集―

織るように暮らす

染織・冨田潤さんと堀ノ内麻世さんを訪ねて

豊かに暮らすということ。それがものづくりの基盤。

茅葺き屋根の家が点在する京都市右京区嵯峨越畑。「にほんの里100選」にも選ばれた、愛宕山麓の棚田と清流が美しい里山に佇む、築80年の古民家。外壁には薪が積まれ、心地よくリフォームされた家の中には、自身の作品のほか、世界各国から集めた布や古道具や骨董が整然と並び、キッチンには畑で採れた野菜が何気なく置かれている。そんな「そこかしこに美が宿っている」とでも表現したくなるような家で暮らすのが、唯一無二の作風で、国際的に高い評価を受ける染織作家の冨田潤さんと、そのパートナーで、自身も染織作家である堀ノ内麻世さん。「生きることと、ものを作ることは同義である」と書く、冨田さんのお宅に伺ったのは、昨年の秋のこと。まさしく「織るような」丁寧な暮らしの中に、二人の作品の、えも言われぬ美しさの秘密はあります。

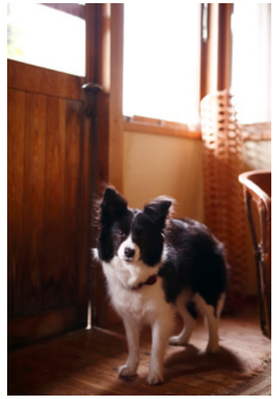
ただものをつくるだけでなく、暮らしそのものを豊かにしていく。言い換えるなら、暮らしそのものが豊かでなければ、つくるものも豊かにはならな

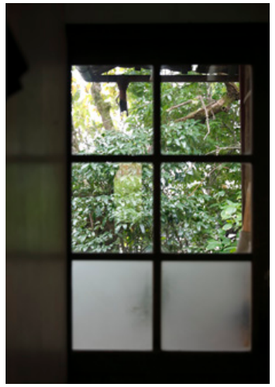
いたるところに美が顔をのぞかせる、無駄のないシンプルな暮らし。料理をつくるのは冨田さんの担当で、来客があるときは蕎麦打ちなどをして客人をもてなすこともあるとか。修業時代の経験から大工仕事もお手のもので、大抵のことは自分でこなしてしまう。その生活の延長線上に染織があるという。

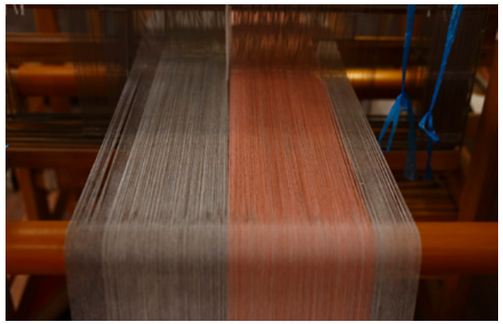
い。冨田さんがそんなことを実感したのは、若き日のオーストラリアやイギリスでの修業時代。仕事と生活を切り離し、ともすると、生活を犠牲にして仕事に没頭する日本の職人とは異なり、仕事と生活を繋げながら人生を謳歌する人たち。そんな彼らの姿勢に強く共感し、自らもそうありたいと思ったことが、今の作品づくりに活かされているといいます。

冨田さんも堀ノ内さんも、口を揃えていうのが「オンもオフもない」ということ。朝起きて、ご飯を食べて、犬の散歩をし、畑で野菜を育てる。そんな当たり前の暮らしの中に、それらと連なるように染織がある。例えば、夕方に行う愛犬との散歩。毎日目にする、棚田に広がる緑や、秋に実る稲穂の輝き、あるいは、空を赤く染める夕焼けや、風に揺れる草花、川を流れる水の表情。そんな四季折々に移ろう豊かな自然はときに気持ちを優しく癒し、ときに染織のヒントを与え、創作の意欲を掻き立ててくれるといいます。

二人の作品が、まるで溶け込むように買い手の暮らしに深く馴染んでいくのは、それが仕事ではなく、日常の中から、ごく自然に生みだされたものであるからに違いありません。







布の表情を追求すること。それが深い美しさを生む。

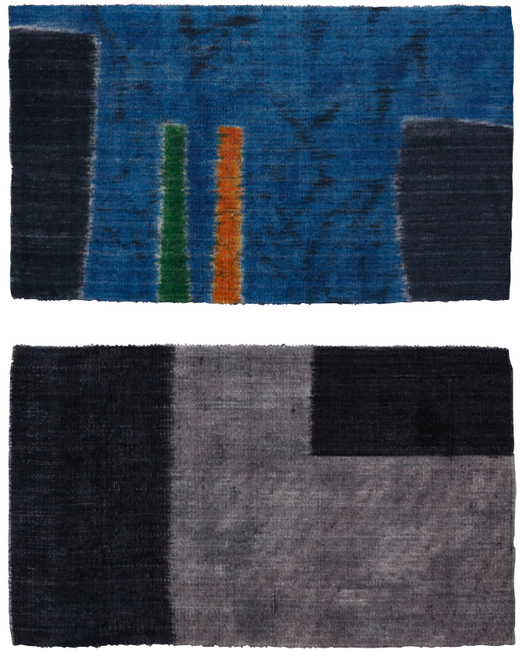
自宅から歩いて7〜8分。かつてシクラメンの花を栽培していたガラス張りの温室を改造した工房は、3分の1が染め場で、残りが織り場。夏は暑く、冬は寒い、約60坪もの大きな空間の中で、冨田さんのタペストリーやラグやパネル作品、堀ノ内さんのショールは生みだされていきます。

「染織は引き算」と冨田さん。頭で思い描いた完璧なイメージを実現するため、一つひとつの工程をきちんとこなし、減点をできるだけ少なくして次の工程へ結びつけていく。そうした確かな結果の積み重ねが、織り上がった布に表れるそうで、どの工程も決していい加減なことはできません。

また、二人が追求する染織は、とても一言では表せない質感と深みのあるもの。市販の画一的な布にはない凹凸があったり、肌触りがあったり。そんな独特の「表情」を引きだすため、何度も染め重ねし、太い細いだけでなく、強く撚ったもの、弱く撚ったもの、異なる種類の糸を混ぜ合わせる。

「染めはさらっとした布に染めることが多いんですけど、織りはその1本1本の糸を染めて、それを織り上げるので、その分、奥行きが増すというか、立体をつくっている感覚に近いですね」と堀ノ内さん。その師でもある冨田さんは「染織は光と影の織りなす立体」であると表現します。

集落の山際にあるため、午前中はそこまで暑くならないけれど、陽が差し込む午後からは室温が急上昇。5月頃からサマータイムを実施して、朝は8時から仕事をして、昼休みを長くとるようにしているのだとか。朝の光が一番良いので、染めは午前に行うことが多いそう。まさしく自然と共にある日々。

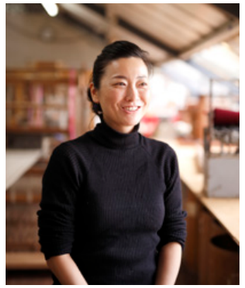


自然の中にいるような感覚になるタペストリー、そこにあると安心できるようなパネル作品、素材感と色彩のユニークさを表現したラグなど、冨田さんの作品は暮らしを豊かに彩ってくれるものばかり。世界的な評価も高い。

そして、もう一つ大切にしていることは、買い手の暮らしに寄り添うものづくり。タペストリーやラグなど、冨田さんが「インテリアとしての染織」にこだわる理由としては「せっかく手間暇かけてつくるものだから、なるべくタンスの肥やしにならず、毎日のように接してもらいたい」という思いが。また「見飽きず毎日新しい発見があるものを」とも。壁に飾る小さなパネル作品であっても、遠くの山を眺めるように、毎日ぼーっと眺めることで、今までのことを振り返ったり、これからのことを考えたり。日々の雑事を忘れて「自分だけのゆったりとした時間」を持ってもらえるものを織りたいと冨田さんはいいます。

冨田 潤

とみたじゅん。1951年、富山県に生まれる。オーストラリア、イギリスで修業し、1982年に京都嵯峨に工房を開く。以降、日本はもとより、パリ、ニューヨーク、ロンドンなどでも個展を開催。その作品は『オスロ—国立美術館』、『イスラエル国立美術館』など、海外の多数の美術館にも所蔵されている。



堀ノ内麻世

ほりのうちまよ。1982年、兵庫県に生まれる。京都造形芸術大学大学院芸術表現科修了後、フリーランスで制作をスタート。2009年に「冨田潤染織工房」のスタッフとなり、自主制作も並行して継続する。京都、大阪、東京を中心に、様々な展覧会を開催。最近は特にウール素材を用いたショール制作に力を入れている。

堀ノ内さんが数年前から強くこだわっているのがウールを用いたショール制作。その素材感や肌触り、布のもつ表情の面白さはもちろん、実際に身体に巻いたときの立体感も計算され尽くされている。

それから、堀ノ内さんのショール。ウールの特性を存分に活かしつつ、小さな「チョボチョボ」のついたものや、動かすと波のように布が動くもの、4枚の布からできているものなど、その「表情」はとても豊かでユニーク。妥協をせずにデザインし、制作したものが、身につけられ、生活に組み込まれていく。そんな素敵で嬉しいことはないと堀ノ内さんは語ります。

このたび『ガマダン』では、そんな二人の展覧会を開催。「織るような暮らし」から生まれる染織の、質感と深みある美しさをぜひご覧ください。

展覧会情報

冨田潤·堀ノ内麻世 二人展

開催日時／11月23日（木·祝）～
12月3日（日）10:00～19:00
会場／ガマダン 金沢市高尾3-4-1
休／火曜
問い合わせ／ガマダン ☎076-298-4800